



2013年5月 第11巻第5号

今月の予定

かく語りき—聖人の言葉

「神はすべての人の中にいらっしゃるが、すべての人が神の中にはいるわけではない。だから我々は苦しむのだ」
(シュリー・ラーマクリシュナ)

「道があるのは空ではない。道はハートの中にある」
(ブッダ)

今月の目次

- かく語りき—聖人の言葉
- 今月の予定
- 2013年4月の逗子例会
「神様の名前の力」(前半) スワームー・メーダサーナンダによる講話
- 2013年3月マニラ訪問
「スワームー・ヴィヴェーカーナンダの説いた、異なる悟りの道の融合」
スワームー・メーダサーナンダの講話 2013年3月10日
- 忘れられない物語
- 今月の思想

2013年夏季戸外リトリート

日時：2013年7月26日(金) 17:00 ~
7月28日(日) 17:00

場所：湯河原温泉 大観荘 〒
259-0314 神奈川県足柄下郡湯河
原町宮上(みやかみ) 542

TEL:0465-62-3785

FAX: 0465-62-2125

www.daikan.net

申込み締め切り：7月19日 または
21日の逗子例会にて最終申込み受付

プログラム：

午前(5:00~12:00) …瞑想, 朝の礼拝,
聖典朗読, 朝食, ヨーガ, 講話

午後(12:00~21:00) …昼食, 自由時
間, 講話, 質疑応答, お茶, 散歩, 夕
拝, 誘導瞑想, 夕食, 夜の集まり ※
27日午後の散歩では、自然の中での瞑
想を予定しております。

講話のテーマ：「神聖な性質 (Divine
Qualities)」スワームー・メーダサー
ナンダ

※講話の大部分は日本語で行われます

アクセス：

- (電車) JR 東海道線 湯河原駅
- (バス) 改札を出て正面、路線バス 2 番線「奥湯河原・不動滝方面行」バス停 13 個目「藤木橋」で下車、橋を渡りすぐ
- (タクシー) 湯河原駅から約 10 分 (1,200 円程)
- (車) 厚木 I.C. → (小田原厚木道路で 30 分) 石橋 I.C. → (20 分) 湯河原カーナビの目的地：「神奈川県湯河原町 大観荘 (TEL: 0465-62-3785)」

参加費：

(宿泊費、食事代、ヨーガ、講話、その他込) 大人…2 泊 3 日 ¥22,000、1 泊 2 日 ¥15,000～、日帰り ¥8,000～ 学生割引…30% off

※今年から 3 食すべてホテルからの提供となり会費設定が変わりました。詳しくは申し込み用紙 (協会のホームページにあります) をご覧ください。

お申し込み方法：

- ①申込用紙をお送りください。(仮予約なので Fax または E メールにてお早目をお願いします) Fax: 045-893-2832 E-mail: shanti.k@r3.dion.ne.jp 泉田 シャンティ宛
- ②予約金 3,000 円をお振込ください。
- ③申し込み受領 E メールまたは Fax をご確認ください。

④予約金振込み締め切り 7 月 19 日 (金) まで

⑤参加できなくなられた場合…お早目に 090-5575-0971 までご連絡ください。なお、ご予約金は返金できかねますのでご了承ください。

※詳しくは、協会のホームページにあります「ご案内」および「申し込み用紙」をご覧ください。

2013 年 4 月の返子例会

「神様の名前の力」(前半) スワームー・メーダサーナンダによる講話

今日のテーマは神様の信者にとっては大切なことですが、神様を信じていない人にとっては関係ないように思えるかもしれませんが。神様の名前とは単語、言葉であり、言葉とは発せられる音、音声です。私たちは「は」「ひ」「ほ」など意味のない音を発することもできますが、普通、考えを伝えるために音声を用います。

音とは何か

聖書には、宇宙の創造はロゴス (Logos、神の言葉) によって行われたと書いてあります。ヒンドゥー教の聖典には、シャブダ (shabda、音) はブラフマンであると書いてあります。エーテル (アーカーシャ) は他の要素の源となる第一の要素ですが、このエーテルの特徴は音です。主は、最初に「アーカーシ

ヤ」として自身を表され、その後、火、風、水、土となって現れたのです。この点は、聖書のロゴスの概念と大変よく似ています。

では、単なる音から言葉としての音声へとどうやって変化するのでしょうか。言葉が最初どのように生成されたのかは誰にも分かりませんが、音が個々の単語を形成し、単語一つ一つにそれぞれ意味があることは皆知っています。これはすべての言語に共通していることで、どの言語の場合も、私たちは訓練を通じて言葉を習得します。文化によって、言葉の表現法が異なるからです。そして、別の単語を組み合わせて新しい単語や意味を作ることもできます。また、言葉が音として発せられる時、言葉とその意味とを切り離すことはできません。言葉を聞けば、特定のイメージが浮かびます。



言葉

そのような意味において、「愛」という言葉を言うと、何かしらのイメージ

が浮かびます。母親が子供にキスしているところ、友達同士が抱き合っているところ、などです。そのようなイメージは意識して浮かべる場合もあれば無意識に浮かぶこともあります。こうしたイメージと共に感情もわき起こります。同様に、「暴力」や「殺人」という言葉を口にすれば、その言葉の持つイメージや感情が生じるのです。「愛」も「殺人」も単なる音ですが、イメージは異なります。このように、言葉の力を借りて私たちは互いに考えを伝え合っています。失礼な言葉を一言口にただけで、長年の人間関係を終わらせることがありますし、軽率な言葉一つが離婚の原因となることもあります。

言葉にはそれ程大きな力があるので、普通の生活の中で私たちは言葉の持つ力を知っていますから、今日こうして神様の名前の力について話していることが理解できるでしょう。私は、子供の頃ケンカをしていて「ボカ (boka)」というベンガル語をよく使いました。これは「バカ」という意味なのですが、友達同士でこの言葉を使ってもたいしたことはありません。ところが、この語と同じ意味である「idiot」という英語を使うと、途端に相手はひどく怒りました。面白いことに、この二つの言葉は意味はほぼ同じなのですが、言葉の持つ重みが明らかに違うのです。

名前

私たちはあらゆるものに名前をつけます。今私の目の前に「マイク」があり、「テーブル」があり、私たちは「部屋」にいます。このように特定のものに特定の名前をつけるは、名前がないとそれぞれを区別することができないからです。何かを意味するには、それを表す語が必要です。時には「これ」とか「あれ」などといった言葉を使うこともあります。近くにあるものをすべて「これ」と呼び、遠くにあるものをすべて「あれ」で済ますことはできません。このような言葉だけでは十分に意味を伝えることができないのです。

人に対しても同じことが言えます。「男性」「女性」「男の子」「女の子」などの言葉はよく使われますが十分ではありません。また「男性」「女性」の前に例えば「若い」という言葉を付けて使うこともあります。これでもやはり十分ではなく、特定の名前が必要です。だから私たちには皆名前が必要で、名前が付いているのです。そうでなければ十分に意思の疎通を図ることができないでしょう。名前を言えばその人のイメージが浮かびます。

子供が生まれると、親は名前を付けて他者と区別します。最初、子供はその

名前が自分のことなのだという意識はまだありませんが、周囲の人はその名前でその子供を認識します。子供は成長するに従い、だんだんとその名前が自分のことなのだと認識するようになります。これは双方向の認識です。私は私の名前で自分を認識し、他人も私の名前で私を認識します。こうして私たちは互いに交流するのです。

自分と自分の名前はとても強く結びついているので、例えば新聞に自分の名前が出ると大変うれしく感じます。名前を広めたり宣伝したりするために多額のお金を使っている人もおり、これが名声欲です。誰でも、自分の名前はよいことで有名になってほしいと思っており、否定的な話題に上らないように気をつけます。このように、批判でも賞賛でも注目の対象は名前です。命の危険を冒すことになっても名前を残すことができるのなら冒険に出ることもあります。実際の人よりもその名前の方が重要になることがあるため、そのために命を犠牲にすることをいとわない人もいます。

名前とイメージ

では、「神様」という言葉と、神様の様々な名前やそれが信者に与える影響について考えてみましょう。言語や伝統文化がいろいろある中で、「神様」を表す言葉もいろいろです。例えば、サ

ンスクリットでは「イシュワラ (Ishvara)」や「バガヴァーン (Bhagavan)」、日本語では「神様」、英語では「ゴッド (God)」、アラビア語では「アッラー (Allah)」と言います。

私たちがこれらの言葉を発する時、心の中には何かしらのイメージが浮かび印象が残ります。特に神様を信ずる者、信者にははっきりと印象が残るものです。もし「人間」とか「動物」といった言葉を口にすれば、人間や動物のイメージが浮かびます。「神様」と言えば、「動物」と言った時と同じイメージは浮かびませんね。

では、神様の名前を繰り返し唱えたらどんな印象が浮かぶでしょうか。神様、神様、神様。アッラー、アッラー、アッラー。また、神様の様々な面や形を表す名前についても考えてみましょう。ご存知の通り、ヒンドゥー教には何百万という神様、女神様がいます。人気がある神様は、シヴァ、ヴィシュヌ、ガネーシャ、ドゥルガ、カーリです。最近日本では特にガネーシャの人気が出ています。面白いことに、最近私が出席したヨーガ・セミナーでは、シルシャーサナ（頭立ち）のポーズをとったガネーシャのイメージがありました。

とにかく、神様や女神様はたくさんいて、たくさん名前を持っています。時には十通り、百通り、千通りの名前が

あります。南インドのヒンドゥー教徒が行う霊的修行の一つに、「サハスラナーマ」すなわちヴィシュヌの千の名前を音楽に合わせてただ唱えるというものがあります。同じことをドゥルガ女神の千の名前で行うこともあります。また、神の化身、アヴァターラの御名を唱えるという宗教的伝統もあり、例えばクリシュナの名、ブッダの名、イエスの名、シュリー・ラーマクリシュナの名をそれぞれ唱えるのです。インドのいろいろなヒンドゥー寺院を訪ねると、信仰心と熱意を込めて神様の名前をひたすら唱える声が聞こえてくるでしょう。

このように神様には様々な名前があります。いろいろな神様に名前があり、一人の神様にもたくさん名前があり、さらに神様の化身の名前があります。興味深いことに、ヒンドゥー教ではたくさんの神様も同じ一人の神様の異なる表れにすぎません。ヒンドゥー教には神様や女神様がたくさんいると思っ

ている人が多いのですが、実はこうした神々はすべて一人の神様の異なる姿なのです。この点が神道との違いです。神道でも神様や女神様がたくさんいますが、これらがすべて一人の神様の異なる表れであるという概念はありません。

聖音

神様に名前がある一方、神様は聖音 (mystic syllable) としても表れます。オーム (Om) はヴェーダの聖音の一つで、タントラには数多くの聖音があります。タントラの聖音をホーマ (護摩) の儀式で聞いた方もいるでしょう。たとえば「フリム (Hrim)」は母神を表します。

このような聖音はどのようにして生まれたのでしょうか。オームは聖者のハートの中に現れました。先ほど、神様は音という要素でこの宇宙を創造したとお話ししました。音の基礎にはアー (ah)、ウ (u)、マ (ma) の三つがありますが、これらが組み合わさって「オーム」ができています。ヴェーダによると、神様はこの宇宙をオームで創造されました。ですからオームはすべての音の根源なのです。人間の言語だけでなく自然界のすべての音はオームに源があるのです。

さて、このオームをどうして知ることになったかですが、最初、深く瞑想している聖者のハートに現れました。サンスクリットの「アナーハタ・ドゥワニ (Anāhata Dhvani)」は、一般に音は物質に源があるという意味です。たとえば、私の前にあるテーブルをたたくと音がします。私が話すとき、物理的な力で震える声帯を空気が通り、様々な形の口を通して、人間の言葉として聞こえるのです。しかし、オームの源

は物質ではありません。

同じことがタントラの聖音にも言えます。火の回りに座っていて言葉が浮かんだわけではありません。たとえば、聖者が深く母神を瞑想しているとき、自身の内部の奥深くから「フリム」という音が聞こえてきたのです。これらは神様と結びつきのある音であり、聖音なのです。

繰り返し唱える伝統

どの国や地域にも、神様の名前を繰り返し唱えるという伝統があります。すべての宗教には、儀式や祈り、瞑想、神様の名前を繰り返し唱える、識別する、など様々な霊的実践があり、これらの様々な組合せや表し方があります。しかし、これらすべてがどの宗教でも行われているというわけではありません。たとえば、瞑想はキリスト教やイスラム教では実践されません。しかし、神様の名前を繰り返し唱える伝統は、ほぼすべての宗教の中に存在します。ヒンドゥー教では、有形の神様、無形の神様、神の化身らの名前がたくさんあることとお話ししました。仏教の場合禅宗に瞑想の実践が見られますが、日蓮宗では聖句を長時間唱えるだけですし、ヒンドゥー教にも聖句の詠唱は見られます。このように、神様の名前を繰り返すことはどこでも伝統的に行っており、違いは繰り返されるその名

前だけです。

人生の目的

このように神様の名前を唱えることは、単なる儀式的行為すなわち模倣なのでしょうか、それとも何か目的があるのでしょうか。もちろん、これは深い意味のある意義あることです。また、唱える人に大きな影響も与えます。ここが私のお話ししたいところです。ホーリー・マザー シュリー・サーラダー・デーヴィーはよく、「Japat siddhi! Japat siddhi! Japat siddhi!」とおっしゃっていました。これは、ジャパを実践しただけで人は霊的生活の目的を実現できるのだという意味です。では、霊的生活の目的とは何でしょうか。

私たちは僧侶になる前から時折『ラーマクリシュナの福音』を学んでいましたし、これまで長年学び続けています。若い頃、私はシュリー・ラーマクリシュナのおっしゃった「人生の目的は神を悟ることである」という言葉にずっと違和感がありました。若い時は皆「神を悟ることがなぜ人生の目的なのか」と考えるものです。学者や作家になって名声を得ることや、頑張っただけで出世してお金持ちになることが人生の目的でないのはなぜなのでしょう。素晴らしい発見を成し遂げるのではなく、神を悟ることがなぜ人生の目的なのでしょう。

長年にわたり僧侶を務めた今、私は「そうだ、シュリー・ラーマクリシュナのおっしゃったことはもつともだ」と感じています。それは、誰もが持続する喜びや平安を求めているのが分かったからです。もし今、「この中に、持続する喜びや平安がほしくないという人はいますか」と尋ねたら、誰もいないということは分かっています。私たちは皆、それを得ようといろいろな方法を試すのですが、うまくいきません。結局、真理や神様を悟る以外に持続する喜びや平安を得ることはできないのだと理解するのです。

ウパニシャッドには次のような思想が述べられています。

「おお、不死のこどもらよ、聞きなさい。

あなたたちに伝えることがある。

死や苦しみ克服したいのなら、真理を知らねばならない

ブラフマンを知らねばならない」

「至高の实在を知らずして

死に打ち勝つことはできない。

他に方法はない。なぜならこれが唯一の方法だから」

「スワミー・ヴィヴェーカーナンダの説いた、異なる悟りの道の融合」
スワミー・メダサーナンダの講話

2013年3月10日 マニラにて

私がマニラを訪問するようになって約10年になります。時には年に2回来ることもあります。今回再びここに来てこうして皆さんとヴェーダーンタについてお話ができることをうれしく思います。また、1年のこの時期にマニラに来られてよかったです。日本は今寒いので、ここでこうして冬を逃れることができました。

この国のほとんどの方は、スワミー・ヴィヴェーカーナンダが誰なのかご存じないでしょう。ごく簡単に言いますと、スワミー・ヴィヴェーカーナンダは近代インドの預言者であり、今年私たちはその生誕150周年を祝います。インドでは、非常に大規模にこの祝賀行事が行われています。祝賀委員会の会長はインドの現首相で、祝賀行事の開会にはインド現大統領が行いました。インド政府は、ヴィヴェーカーナンダが創設した組織であるラーマクリシュナ・ミッションと協力し、様々な慈善活動や宗教的プロジェクトでこの記念すべき特別な年を祝うべく大きな予算を投入しています。

この祝賀行事は世界各地でも開催されています。「スワミー」と呼ばれているヴィヴェーカーナンダは、1893年に米国シカゴで開かれた第1回万国宗教会議でスピーチを行い、一夜にし

て有名人となりました。この歴史的出来事を記念して、スピーチの行われた場所には記念碑が設置され、ミシガン・アヴェニューのその辺りはスワミー・ヴィヴェーカーナンダ・ストリートと改称されました。また、シカゴ大学にもスワミーの名を冠した職位が創設されました。日本でも数々のプログラムを実施する予定です。ここラーマクリシュナ・ヴェーダーンタ・ソサエティ・オブ・フィリピン (Ramakrishna Vedanta Society of the Philippines) では、9月13日～15日に様々なプログラムの開催を企画しています。祝賀の集まりを開き、来賓を招いてスピーチをいただき、文化プログラムも行おうと考えています。さらに展示会や困っている人たちへの奉仕活動も実施する予定です。

こうした祝賀行事が単なる儀式的なものなのか、それとも何か特別な理由があるのかと思われるかもしれませんが。私たちにとって祝賀行事は、スワミーの生涯や教え、貢献をじっくりと検証する機会なのです。インドや世界に対し彼はどのように貢献したのでしょうか。彼と現在とのつながりは何なのでしょう。

インドへのスワミーの貢献は非常に大きなものです。実際のところインドにおいて、政治、社会事業、教育、宗教などの国家レベルのリーダーでス

ワーミージの影響を受けなかったという人は一人もいません。マハトマ・ガンディ、ラビンドラナート・タゴール、賢者で哲学者のオーロビンド、元首相 J・ネルーなどがその例です。

この国にとってより大切なこととして、全世界に対するスワーミージの貢献とつながりについてお話ししましょう。一つ目は、スワーミージが一人一人の中に神性があることを気付かせその神性を現す方法を示したことです。スワーミージにとって宗教とは教義ではなく、哲学でも儀式でも聖典でもありません。「宗教とは、すでに人の中にある神性を現すことである (Religion is the manifestation of divinity which is already in man)」これがスワーミージの考えた宗教の重要な概念です。この概念について深く考え瞑想してみてください。あふれる光明があなたに差し込んでくるでしょう。宗派などとは全く関係のない定義です。どれ程の富や名声を手にしていようとも、自らの神性に目覚めそれを現そうとしないのであれば、人生は無意味です。恐れや苦しみ、不安に打ち勝つことはできませんし、持続的な真の喜びや平安を求める気持ちも湧かないでしょう。

スワーミージの二つ目の大きな貢献は、宗教間の調和です。宗教間の調和は私たちの生活に、家庭や地域社会、さらに国際間といった広義のレベルを

含めた調和をもたらします。この調和の基準となるものは何でしょうか。調和は、人道主義の概念の一つでした。これは、私たちが皆人間だからです。カール・マルクスは貧困を基準にして世界中のプロレタリアの調和を図ろうとしましたが、この調和の概念は特定のグループの人々に限られていました。人道主義では、その調和の概念から動物や自然が抜けていました。マルクスは貧者のための調和を説きましたが、これには富裕階級や中産階級が含まれていませんでした。

スワーミージは、調和の真の基準は内なる結びつきであると唱えました。これはスワーミージの三つ目の大きな貢献です。私たちは、意識のレベルで皆互いにつながっているのです。人間も動物も自然もすべて結ばれているのです。ヴェーダーンタ哲学の観点では、意識はあらゆる所にあります。これは潜在的な場合もあり、ちょうど物質の中にある原子のようなものです。原子を壊すともものすごいエネルギーが放出されますね。この概念に基づいて言えば、調和は意識を通じて可能となるのです。哲学者や宗教のリーダーたちの中でこの調和について初めて語ったのは、『バガヴァッド・ギーター』の中のクリシュナです。彼が初めて、様々な調和の概念を明らかにしたのです。『ギーター』の一つの章でクリシュナが説く教えが、一つの悟りの道と見なされ

ています。そして、これらがすべてヒンドゥー教の教えの一部であったということは真実です。当時は、キリスト教や仏教、ジャイナ教、イスラム教はどれも存在していませんでした。ですから、シュリー・クリシュナは古代インドで初めてこのような宗教間の調和の手本を示したのです。

次にブッダが現れ、その死後、仏教徒の間で宗教会議がいくつか開かれました。このような会議は、カトリック教会の主導でカトリック教徒間でも開かれました。これらの会議の目的は、ブッダやキリストの教えの解釈について異なる意見の調和を図ることと、信徒の間の調和を促進することでした。しかし、調和の確立を目指すこのような試みは、同じ一つの宗教内だけを範囲としており、仏教の中だけとかキリスト教の中だけを念頭に置いていました。そして1893年、アメリカ人が歴史上初めて万国宗教会議をシカゴで開催したのです。

この会議の目的は高貴で偉大でした。世界の全宗教の代表者らを集めて自身の宗教についてスピーチしてもらい、世界に存在する様々な宗教についてアメリカ人が学ぶというものでした。同時に、異なる宗教のリーダーらが互いに知り合い、多少なりとも意見を交換する機会を得られるというものでした。しかし、実は真の意味での宗教間の調

和が目的ではなく、「隠れた目的」のようなものがあつたのです。それは、キリスト教の優越性を確立しようとする試みでした。

スワームージーは、万国宗教会議の関係者からの正式な招待状なしに参加しました。興味深いことに、この「招かれざる」講演者は、壇上であがってしまい順番を遅らせてもらったにも関わらず、スピーチを行って会議の話題をさらいました。まさに「来た、見た、勝った (veni, vidi, vici)」のシーザー一流でした。スワームージーはサラスワティ（学問の神様）を思い出して、感情を込め威厳と悟りの力を以て短く温かいスピーチを行いました。途端に、聴衆は電気が走ったかのように反応し、スワームージーに大きな拍手を送りました。スピーチの中でスワームージーは確信を持って言いました。

「この会議はこれまでに開催された会議の中で最も気高い会議である。この会議は、『ギター』の説く『どのような形を通じてであろうと、私のもとに来る者に、私は触れる。各人は奮闘努力し各々の道を進み、それらの道はすべて最後には私のもとに通じる』という素晴らしい原理を世界に宣言し、その正しさを証明している。宗派間の争いや偏狭な思想、そしてそこから生まれる狂信はこの美しい地球を長い間支配してきた。世界には暴力がはびこ

り、幾度となく人々の血が流され、文明は破壊され国々や民は絶望した。このような恐ろしい悪魔がいなかったなら、人間社会は今頃はるかに進歩していたことだろう。しかし時が来たのだ。私は強く望む。今朝この会議を祝して鳴り響いたあの鐘が、すべての狂信に、剣やペンによるすべての迫害に、そして人々の中にありこれらと同じ道をたどらんとする無慈悲の心に、終焉を告げる弔鐘であることを」

この「調和の教え」は国際舞台で初めて説かれ、宣言されたのです。スワミーのこのメッセージの背後にあったものは何なののでしょうか。今から4千年以上前のインドの聖典『ウパニシャッド』の中に、この調和の概念が次のように説かれていました。「真理は一つ、聖者はそれを様々な名で呼ぶ」神様は一人、至高の实在は一人、名前や形が違うだけであると。この概念はインドでさえも忘れられ実践されないことが多く、その結果が正統主義や偏狭さ、宗派主義、カースト的社会制度なのです。

近代の聖者シュリー・ラーマクリシュナがインドに現れ、この真理を実践し悟りを得ました。ラーマクリシュナは、ヒンドゥー教の様々な悟りの道をまず実践し、その後キリスト教やイスラム教を実践してイエスや預言者ムハンマドのビジョンを得たのです。そして

様々な道で神を悟った後、ある重要な結論に達しました。「信仰の数だけ道がある」ということです。これは先ほどの「真理、あるいは神、至高の实在は一人、そこに至る道はいくつもある」という『ウパニシャッド』の概念と同じです。ラーマクリシュナはよくこう言われました。「神様を限定してはいけない」私たちはエゴや無知のせいで、しばしば神様を限定します。「神様はこれだけで、他にはあり得ない」と。私たちがこのように言う時、自分の宗教や預言者、聖典だけが真実で、他の宗教の神様や預言者、聖典は真実ではないと思っているのです。つまり神様を限定しているのです。

神様は無形で有形のはずがないとか、神様には形があり無形のはずがない、あるいは神様の形は一つだけで他の形はあり得ないなどと言うことは神様の限定です。神様は無限です。なのに、どうして無限なものを限定できるのでしょうか。神様は永遠で無限、全知全能で遍在であるということを受け入れるならば、どうして神様を限定できるのでしょうか。これこそ神様への冒瀆です。

ですから、シュリー・ラーマクリシュナはすべての信者に、自分の思う神様に従い、自分の道を進み、他者は批判しないようにと勧めたのです。ラーマクリシュナの説いたこの素晴らしい思

想は、今日の宗教間の調和の基準となっています。ラーマクリシュナは知力で推測してこの結論に至ったのではありません。実際に悟りを得たのです。ラーマクリシュナは最初の弟子であるスワームージーにこの宗教間の調和を教え、訓練しました。スワームージーが後にこれを説いたのもこういう背景があるのです。

しかしこの概念には、実践を可能にするために解決しないといけない問題がいくつかあります。まず、神様は有形であるのに、または神様は様々な形を取るのに、同時にどうやって無形であることができるのでしょうか。この問題についていろいろな宗教が反対の見解を示しています。ヒンドゥー教と神道は有形の神様、多数の神様や女神様を信じています。一方、セム語族の宗教であるユダヤ教、キリスト教、イスラム教などは有形の神を信じていません。この二つの対立する見解に折り合いをつけられない限り、真の宗教間の調和は成し得ないでしょう。これについて、シュリー・ラーマクリシュナの語った話をお話ししましょう。

「森の中で木の上の動物を 4 人が見た。しかしその動物が何色だったか、それぞれが違う色を見たと言い張った。一人は赤かったと言い、一人は黄色、一人は青、一人は緑と言った。4 人ははっきりさせようと、木の下に座ってい

た男の意見を聞いた。男は 4 人とも正しいと言った。男はその動物をよく知っていたのだ。それはカメレオンで、体の色を様々に変え、時には色がないこともあった」

物理学の世界では、水の例があります。化学式は H_2O で、温度によって様々な形を取ります。同じ H_2O が、固体である氷になったり、液体である水になったり、目に見えない水蒸気として空気中に存在したりできるのです。物理学の領域では、同一の物質が異なる形を取ることや形がないことさえもあるのです。物質の場合であればこのことは簡単に理解できます。神様の場合でも、有形でありながら同時に無形であるということを認めるのは理に適っているでしょう。しかしこのことを完全に理解するには、本当に神様を悟る必要があるのです。悟りを得るという問題や必要性はここにあるのです。シュリー・ラーマクリシュナはこの悟りを得ました。純粹意識として形や性質のない神様、インドの聖典で言うところのブラフマンを悟ったのです。一方、同じ神様をカーリ母神やクリシュナのビジョンとして得てもいるのです。

さらに、人間と神様との関係、インド哲学で言うジヴァすなわち具現化した魂と超越の魂であるブラフマンとの関係の問題があります。これについても異なる見解があります。人間と神様、

ジヴァとブラフマンは全く異なる二つの存在であると言う人がいます。また、人間と神様が完全に別々ではなく人間を神様の一部だと信じる人たちもいます。さらに、人間と神様を基本的に同一の存在であると見る人たちがいます。こうした異なる見解をどうやって調整すればいいのでしょうか。

インドの偉大な叙事詩『ラーマヤナ』の登場人物の一人にハヌマーンというサルがいます。ハヌマーンは、神の化身であるラーマの信者でした。ラーマはハヌマーンに自分をどう見ているのかと尋ねました。ハヌマーンはこう答えました。「主よ、私は自分をただの肉体だと見る時、あなた様と私は別々の存在だと感じます。しかし、自分を肉体と魂の混合、具現化した魂であると見る時、あなた様が全体で私は一部であると感じます。そして自分を純粹意識だと見る時、あなた様と私には何ら違いがあると感じません」こう考えると、先ほどの三つの異なる見解に折り合いがつかます。

さらに、神を悟る道がなぜいくつもあるのかという疑問もあります。キリスト教徒やイスラム教徒は神への献身的な愛の道を主に重視しています。仏教徒は、ブッダが本來說いたように知識を重視しています。ヒンドゥー教は、献身的愛、知識、瞑想、奉仕など様々な道（バクティ・ヨーガ、ギャーナ・

ヨーガ、ラージャ・ヨーガ、カルマ・ヨーガ）をすべて認めています。これらの異なる道の一致点はどこにあるのでしょうか。異なる道が存在する理由は何なのでしょう。

人間は一人一人適性や能力が違います。だからそれぞれの適性や能力に合わせるために異なる道があるのです。シュリー・ラーマクリシュナのたとえ話に、母親は夫や子供らの好みや消化力に合わせて同じ魚を違う方法で料理するというものがあります。

宗教は同じ原理を提唱できます。人はそれぞれ気質や心のあり方が違います。理性的な側面が強い人もいれば、瞑想を好む人、識別を好む人、情緒的な人などもあります。様々な宗教の道は気質や適性の違いに合わせて選べるのです。異なる道があるのはこういうわけであり、このような見方をすれば社会のレベルで宗教間の調和を図ることも可能です。個人のレベルでは、同じ人が様々な道（ヨーガ）を実践することができます。

スワーミージは、自身の創設したラーマクリシュナ・オーダー・アンド・ミッションの紋章を、神を悟るための異なる道の調和を表すものとしてデザインしました。紋章の中には波立つ水、蓮、太陽、へび、白鳥が見えます。波立つ水は行為、すなわちカルマ・ヨー

ガを、蓮は神への信愛であるバクティ・ヨーガを、太陽は叡智の道ギャーナ・ヨーガを、へビはクンダリーニ、すなわち瞑想の道ラージャ・ヨーガを、白鳥は悟りであるパラマートマンを示す象徴です。これらのヨーガ（道）の一つか二つ、あるいはすべてを実践することで人は神を悟ることができるのです。これが、スワミーの考える調和の象徴です。

また別の問題として、神の化身は一人だけしか存在しないのか、それとも複数が存在し得るのかという点があります。キリスト教ではイエスは神の唯一の息子ですが、これは神の化身の概念によく似ています。ヒンドゥー教には神の化身がたくさんいます。『バガヴァッド・ギーター』の中で主はこう言われます。「私は様々な時代に、人間の姿を取って現れる」少なくとも、双方とも神様は人間になって生まれてくるということを認めていますから、この点においては異なる見解を調整することができますでしょう。

最後の論点は、異なる概念を持つ異なる宗教の実践にどう折り合いをつけるかです。この問題は宗教間の調和のためにとっても大切です。これには三つの点が挙げられます。まず、すべての宗教は基本的な要素の中でも純粋性と神の愛を重視していること。これはすべての宗教に共通しています。次に、違

う宗教を信仰する人は互いにこのような一致点に目を向けるべきであり、一致しない点にばかり気を取られているべきではないということ。最後に、議論ではなく実践にもっと重点を置くべきだということ。実践すればする程、他者の信仰を受け入れて認める姿勢になるものです。実践しないと議論が増えるばかりで、不和の可能性が増すのです。

ここまで宗教の様々な道（ヨーガ）の調和と異なる宗教の調和は可能であるということを見てきました。しかしそもそも、ヒンドゥー教やキリスト教のように知識の道や愛の道などの異なる道の調和を、実践する必要があるのでしょうか。まず、神様を悟る道であるヨーガの中には他のヨーガを排除するものはないということをおぼえておきましょう。たとえば、無私の働きであるカルマ・ヨーガの道を主に進む信者は、他のヨーガも活用することができます。私たちは皆、愛したいという本能的な気持ちがあり、最も高い形の愛は神への愛です。私たちにはまた学びたいという自然の欲求があり、子供の時だけでなく生涯を通じてこの欲求を持ち合わせています。この欲求は、私たちが神様、至高の存在を知った時に最も満たされることができます。また、誰もが働きたいという気持ちを持つのは当然ですし、実際、働きを逃れることはできません。この欲求を最も高い形で

満たすのは、無私の働きを為すことです。神様のために働き、他者の中に神様を見て他者に奉仕するのです。さらに、私たちには考えたいという気持ちが自然にあり、私たちは常に何かを考えています。この気持ちが最もうまく満たされるのは、神様、至高の实在について考えることです。

要約すると、愛したいという欲求を最高の形で満たしたいのなら、愛の道であるバクティ・ヨーガを実践するのです。知識を最高の形で満たしたいのなら、知識の道ギヤーナ・ヨーガを、働きたいという気持ちは無私の働きであるカルマ・ヨーガを実践するのです。では、神様を悟るための様々なヨーガを実践するのに落とし穴があるとしたら、それをどうやって避ければよいのでしょうか。

愛の道であるバクティの道だけを進む場合、感情的になりすぎて狂信的になる可能性があります。ギヤーナ・ヨーガでは常に識別し自己に集中するあまり、無情で無味乾燥した利己的な人間になる危険があります。無私の働きの道カルマ・ヨーガでは名声への欲望を持つ危険があります。瞑想の道ラージャ・ヨーガでは、肉体を浄めて純粹にする必要があることから肉体にばかり気を取られる可能性があります。一つのヨーガだけを実践し他のヨーガすべてを排除すると、こうした落とし穴

にはまる可能性があります。ですから、こうした危険を賢明に避けるために、すべてのヨーガを実践するとよいでしょう。そうすれば靈的修行もより面白くなります。ではどのようにすればいいのでしょうか。

ラーマクリシュナ・オーダー（僧団）の毎日のスケジュールを見てみましょう。私たちは、朝起きて瞑想します。次に線香を焚きながら神様に食べ物を捧げます。日中は様々な仕事があり、同時に生活の一部として神様のことをいつも考え、永遠のものと一時的なものとの識別を心がけます。こうして私たちはすべてのヨーガの調和を実践しています。

信者の方々も同じパターンで調和を実践できます。そして、ヨーガの調和、神を悟る様々な宗教の道の調和を実践する方法を、異なる宗教の調和を実践するのに応用することができます。私たちは今日、人と交わらずに生活することはできません。現代のテクノロジーにより、私たちは一体になり共に生きざるを得なくなっています。もし他者と正しい方法で交流する方法を知らなければ、互いの近さから関係に緊張が生じて友愛よりも苦痛を感じ、望まない出来事がたくさん起こる可能性があります。

スワームージーの調和のメッセージは、

この意味において大変重要です。日本の安倍首相、アメリカのオバマ大統領など今日の著名人にも認められています。安倍首相もオバマ大統領も訪印した際のインド国会でのスピーチで、スワミーの言葉を引用しました。

宗教間の調和は、異なる宗教を信仰する私たちが平和で調和に満ちた生活を送るのに、そして互いに学び合うのに必要で大切なことです。私たちは自身のアイデンティティを保ちながら同時に他者から学ぶべきです。宗教間の調和という同じ原理を、家庭や地域社会、さらに国際間のレベルまで広げるのです。そうすれば、完全な調和を確立することができます。そのためには、どのようにすればよいのでしょうか。

先ほど言ったように、まず私たちの中にある「意識」の存在を認め、同じ意識が他者の中にも存在することを認めるのです。私たちは意識を通じて互いに結びついています。この考えを重視し、理解し、認め、そして実践しましょう。

最後に、宗教間の調和に深い信仰を持ちその実現への決意を示したスワミーの言葉を引用して、私の話を終わりにしたいと思います。これを、私たち全員が自分のものとしましょう。

「私は、過去に存在したすべての宗教

を認め、それらすべてによって礼拝する。それらの宗教が有形無形のどのような神を礼拝したのであれ、私はそれらの一つ一つで神を礼拝する。私はイスラム教徒のモスクへ行こう。キリスト教徒の教会に入って十字架の前でひざまずこう。仏教寺院に入りブッダと仏法に帰依しよう。森に入って、すべての人のハートの中に靈性の光を見出そうとするヒンドゥー教徒と共に座って瞑想しよう。」

「私はこれをすべて行うだけでなく、今後やって来るすべてのものに私のハートを開き続けよう。神の本は終わったのか。それともまだ啓示は続いているのか。靈的啓示を行う世界の素晴らしい本よ。聖書、ヴェーダ、コーランなどあらゆる神聖な本は、単にページの数が多いのではない。これから明らかとなるページを無限に有しているのだ。私はすべての聖典のためにこれらのページを開いて、現在に立つ。しかし、無限の未来のために自らを開いておこう。過去のすべてを受け入れ、現在の生活を享受しながら、今後やって来るすべてのものに対してハートの窓を開け放しておくのだ。過去のすべての預言者に敬意を表す。今日のすべての預言者に敬意を表す。未来の預言者に敬意を表す」

忘れられない物語

癒し

Fax: 046-873-0592

Website: <http://www.vedanta.jp>

Email: info@vedanta.jp

師は、痛みに苦しんで救いを求めて師のもとにやって来た人に尋ねました。

「あなたは本当に治療を望んでいるのかね」

「そうでなければ、わざわざあなたのところに来てはおりません」

「いや、違う。大勢の者が、治療のためでなくやって来る」

「何のために来るというのですか」

「治療ではない。治療は辛いものだ。安心を得るためにやって来るのだ」

師は弟子たちに向かって言いました。
「苦しまずに治療したいと望む者たちは、変化なしに進歩したいと望む者たちと同じだ」

(イエズス会士 アントニー・デ・メロ)

今月の思想

「できる時はいつでも親切にきなさい。それはいつもできることだ」

(ダライ・ラマ)

発行：日本ヴェーダーンタ協会

249-0001 神奈川県逗子市久木 4-18-1

Tel: 046-873-0428